



(一 関)

○mの広がりをもつ遺跡である。遺跡地内には伝三十三間堂跡や灌漑用の花立溜池が含まれる。遺跡の立地は西は特別史跡毛越寺跡・観自在王院跡、東は特別史跡無量光院跡、南は志羅山遺跡と接し、金鶏山の南東側緩斜面から鈴沢の池跡に

岩手・^{はなだて}花立II遺跡

- 1 所在地 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山ほか
- 2 調査期間 第三次調査 一九九三年(平5)一〇月
- 3 発掘機関 平泉町教育委員会
- 4 調査担当者 菅原計二
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

花立II遺跡は平泉町の中心市街地に含まれ、JR東北本線平泉駅の北西側五〇〇mの付近を中心として、東西三〇〇m、南北六〇

続く比較的平坦な地形で、標高は二五〜四〇mほどである。

平泉町の中心市街地周辺は一一世紀末から一二世紀後半にかけての約九〇年間、奥州藤原氏が四代にわたり本拠地とした一帯で、この時代の遺構・遺物が密集する地域である。花立II遺跡に隣接する志羅山遺跡北側では、一九七四年に鈴沢地区区画整理事業に伴う緊急調査が行なわれ、中尊寺境内や柳之御所跡に製品を供給した一二世紀の鈴沢瓦窯跡が発見されている。この志羅山遺跡北側と花立II遺跡を含むこの周辺は、区画整理事業により重機による削平と土盛りが行なわれて整然とした水田区画となったが、近年は徐々に宅地化が進んでいる。

一九九三年度に実施した第三次調査は、店舗兼住宅の建築に伴う約一四〇㎡の小規模な面積を対象としたものである。この調査では、今回報告する木簡が出土した井戸一基のほか、年代不明の溝や柱穴が少数検出されたが、前述の区画整理による地山の削平が調査区全体に及んでおり、検出された遺構の上位面はいずれも失われていた。井戸から同時出土した遺物には、かわらけ(手捏ね成形とロクロ成形あり)、渥美産・常滑産の陶器片、木鉢、刀子の鞘、下駄の歯、紡績用具の杵木・横木などの木製品、中国定窯産の白磁口禿皿の破片などがある。

8 木簡の积文・内容



(216) × (17) × 4 081

(2) ・「聞 詮」



(114) × (16) × 3 081

(1)は井戸六層から出土した。上部と両側面を欠く。下端はほぼ直線的に切断されている。書かれた文字は漢字とみられるが、旁が失われており、文字の判読はできない。一文字は禾偏または示偏の文字とみられる。

(2)は井戸六層と八層から出土した二つの破片が接合したものである。板材の上端は直線的に切断されている。両側面と下端を欠く。表には笹の葉状の墨画が描かれ、その下に「聞」など四文字が書かれている。裏にも墨画とみられる墨痕と、二文字が書かれている。木簡(1)(2)が出土した井戸は、共伴した遺物から一二世紀中頃から後半に廃棄されたと考えられる。

9 関係文献

平泉町教育委員会『平泉遺跡群発掘調査報告書』第四三集（一九九四年）

(菅原計二)

